

崇武館
館長 飛鳥宗一郎
(宗雄)

先人の言葉から学ぶ（14）

「敬天愛人」と西郷隆盛

はじめに

今月は、『敬天愛人』を取り上げ、好んでこの言葉を揮毫したという明治維新を主導した西郷隆盛（文政10年～明治10年、1828～77年。以下、単に「西郷」と記す）の行動と、この言葉が人生に示唆するところなど概観してみたいと思う。

西郷の人生は、拙い筆者から特段述べるまでもなく、鎖国から転換し開国に至る大いなる決断を促し、藩政時代から近代国家へと導く数々の功績を残し、悲運な最後をもって生涯を閉じる。古を尋ねれば、平家打倒し武家社会を築く功労者であった源義経（1159～8年）にしても同様で、際立った英雄の最後は悲劇で終わるのが定めかもしれない。

西郷というたった一人の人間が、こんなにダイナミックな生涯を送り、しかも事実と思えないほどドラマチックである。

それぞれの場面に情実を伴い、相手が誰であろうと悠揚せまらず、信念に揺るぎなく、清貧かつ無欲な生き方は、今回テーマの言葉と一致する。



大久保利道、木戸孝允、それに西郷の三人を「維新の三傑」と呼ぶ人が多いが、筆者は西郷を大久保や木戸と同列に置く気持ちはない。西郷のファンであるという理由ばかりではなく、生きた足跡は全く異質だからである。

西郷は、極度の写真嫌いであったというから、1枚の写真も残っていない。左の肖像画は、死後に親族（弟の西郷従道と、従兄弟の大山巖など）の容貌を参考にして描かれたものという。

東京・上野公園正面に立つ西郷隆盛銅像は、明治31年(1898年)に建立されたもので、1868年(慶応4)に江戸城を無血開城させ、江戸市中を戦火から救った功績によって造られた。作者は、高名な彫刻家高村光雲（1852～93年）で、草履ばき着流しの散歩姿で愛犬とともに立ち、上野のシンボリック的存在となっている。



1 敬天愛人の出典

(1) 初出

「天を敬い、人を愛す」と読むが、西郷がこの言葉を揮毫するようになったのは明治7年（1874年）以降と思われ、現在、10点の真筆が残っている。墨痕太く観る者をして圧する迫力を感じさせる。

この言葉を最初に使ったのは、中国清朝第4代皇帝の康熙帝（こうきてい、1661～1722年）だといわれている。康熙帝は、唐の太宗皇帝と並び称されるほど、中国歴代皇帝の中でも傑出した名君と称された。内政、外交ともに優れた手腕を発揮したばかりか、自ら儉約に努め、国家経費の無駄を省き、財政を豊かにして減税も度々実行するなど善政を敷いた。

康熙10年（1671年）に康熙帝がキリスト教会に対し「敬天愛人」と書いた扁額を与えたのが始まりとされる。皇帝や天皇が寺院の山門扁額を揮毫（宸筆という）することは珍しいことではない。

康熙帝とキリスト教の関係は定かでないが、布教に携わる人たちの求めに応じたものか、自ら選んで書いたものか判然としない。博愛精神を宗旨とするキリスト教の思想と近似する。



康熙帝画像

(2) 西郷とこの言葉

西郷は大変な勉強家であるとともに活動の実践家として、「敬天人愛」の意味と、その言動に一致点は多いが、「敬天人愛」の言葉と何処で出会ったのかは、筆者不勉強にしてここに記せない。

調べた資料によれば、一つには、西郷を表舞台に引き出した薩摩藩第11代藩主の島津斉彬（1809～58年）が東西の学問に通じていたため、斉彬の影響からとされるが、

明治7年なら斉彬が死んでから15年余過ぎている。二つには、西郷が福沢諭吉（1835～1901年）の「文明論之概要（1875年初版）」を愛読していたためとされるが、この書には類似の記載がない。したがって、両者共に肯定できない。

戊辰戦争で奥羽越列藩（陸奥、出羽、越後）同盟として新政府軍と戦った庄内藩（藩府は山形県鶴岡市）が戦いに敗れた時、大参謀の西郷による寛大な敗戦処理に感謝し、旧庄内藩士たちがしばしば鹿児島に西郷を訪れて教えを乞いその言葉を記録し、西郷の没後に刊行した「西郷南州遺訓」があって、明治7年に記録とある「遺訓」21に、『道は天地自然の道なるが故、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己をもって終始せよ。（後略）』と記載されている。「敬天愛人」を揮毫するようになったのは、晩年の4年間である。

2 西郷隆盛の一生

(1) 出生

西郷は、文政10年（1827年）11月7日、鹿児島城下の下加治屋町で、父・西郷吉兵衛、母・満佐子の四男三女の長男として生まれ、幼名は小吉、長じて隆盛、通称は吉之助である。西郷とともに明治維新を主導する大久保一蔵（1830～78、後の利通）も、その2年8か月後に200mばかり離れたところで生まれている。

西郷の父は士族では下から二番目という少禄の下級武士で、貧乏暮らしの中で育っている。持って生まれた身分が生涯つきまとう社会であるため、第11代藩主の斉彬との出会い後は異例の出世といえる。

(2) 腕の怪我

8歳から藩校「造士館」に入って教育を受けるが、当初は四書の素読も書道も算盤も他者に比べて進捗しなかったという。12歳の時、少年同士の争いの仲裁に入り、相手が抜いた刀で切りつけられ右肘内側の神経を切ってしまった。以来、腕が真っ直ぐ伸ばすことができず刀を握れなくなったため、武芸は諦めたが学問に精出し、大きく頑丈な身体で相撲を取るのが大好きであった。

(3) 参禅と学問の師

隆盛は、16歳から藩主島津家の菩提寺である玉龍山福昌寺住職・無参和尚に参学し、併せて参禅するようになる。禅の修行には殊の外精進し、生涯その影響を受けている。

西郷に日常畏敬の念を持って兄事したのが大久保利通で、長じて大久保は『西郷の思い切りがよすぎるのは、禅の影響だ』と語っていた。

残念ながら、この福昌寺は歴代藩主の菩提寺でありながら、明治の廃仏毀釈で破壊され、今は歴代藩主の墓群のみが残る。

廃仏毀釈は、明治新政府の悪政と筆者は考えている。

(4) 西郷の役付と上司

18歳の時、「郡方書役助」となり、職を与えられ27歳まで勤めた。

この役職は、村々を巡回して年貢を決めて歩くもので、上役と農民の間に挟まれる立場から、心身共に苦勞の多い仕事であった。この職務の中で、上司で郡奉行の迫田太次右衛門から西郷は大きな影響を受けている。迫田は、西郷に農政を教えたばかりでなく、『役人が贅をつくし驕慢になったとき、その国は必ず滅びる』とか、『国のため、まず自ら正しくありたいと思うがために耐えているのだ。耐えるためには果てしがない己が欲念を、先ずはね除けてしまわなければならぬ』、『欲にはきりが無いものだ。欲を満たすこともまた貧することと同様に、人の心身を苛むものだ』と語って聞かせた。迫田から学んだことを、西郷は生涯身をもって実践するのである。

(5) お由良くずれ

西郷が「郡方書役」を解かれ、別役に着くため城下に帰った頃、第10代藩主の島津斉興（1791～1859年）は長男の島津斉彬（1809～58年）がいるにも拘わらず、側室お由良の方が生んだ三男・久光（二男・斉敏は鳥取藩の養子）を寵愛して跡を継がせたいがため、斉彬が40歳を過ぎても跡目を譲ろうとしなかったため、苛烈なお家騒動が展開されていた。

結局のところ、叔父にあたる福岡藩主・黒田斉溥（くろだ・なりひろ）の執り成しにより、『不当なる庶子（妾腹）擁立は、幕府も黙認しておれぬ』のお達しにより、ようやく斉興は隠居し、43歳という高齢の新藩主、島津斉彬が誕生する。

(6) 新藩主島津斉彬との出会い

嘉永4年（1851年）2月、第11代藩主となった島津斉彬は、曾祖父の第八代藩主島津重豪（しげひで、1745～1833年）の影響から洋学に興味を持ち、当代一の開明派大名と言われた。斉彬は、藩主となるや藩の富国強兵に努め洋式軍艦製造、鉄鋸の造営、地雷水雷の作成、国内初の蒸気機関の国産化を試み、国産蒸気船「雲行丸」を完成させる。



島津斉彬画像

斉彬が藩主になった翌年のこと、西郷は祖父、父、母を立て続けて亡くして葬式の連続、貧乏暮らしも底をついていた。失意の中にも激務に耐えながら、再び福昌寺の無参和尚について参禅に励んでいた。改革に有用な人材探しをする斉彬に対し、無参和尚は、『西郷は、小身ながらすばらしい若者である』と推挙した。

嘉永7年（1854年）1月の斉彬初出府に際し『西郷を供に加えよ』と命が下った。国境を超えようとするとき斉彬は、『西郷吉之助をここに呼べ』と、普通ならお目通りも叶わぬ下級身分に声が掛った。平伏する西郷に『その方が吉之助か。面を上げよ』と。おそろおそろ顔を上げた西郷を凝視した斉彬は、『世に、このような人間の顔があるものか・・・』と感嘆のうめきを発した。

江戸屋敷に着くと、西郷を只ならぬ人物と見抜いた斉彬は、「庭方役」（お庭番とは違う）という役目に着けた。藩邸の庭を管理する役ながら、斉彬が庭に出れば会うこ

とできる立場にある。ここに、明治維新を主導する西郷活躍の端緒が切られた。

(7) 斉彬の死

斉彬ら先進派の大名たちは、病弱で継嗣者を持たない第13代将軍徳川家定（1824～58年）に代わる次代の将軍に、徳川御三家の一つの一橋慶喜（1837～1913年。後に第15代将軍）を推していたが、井伊直弼が大老に着くと、その地位を発動して「安政の大獄」（安政5～6年、1858～59年）という大弾圧に敗れた。

斉彬は、この事変に対して藩兵5千人を率い上洛を決意したが、安政5年7月8日鍊兵観覧の最中に発病し16日に死去（死に方が他の病因に当てはまらず、毒殺説あり）してしまった。

斉彬の後は、遺言により異母弟久光（1817～87年、お由良の子）の長男忠義（1840～97年）が第12代藩主を継いだ。実権は第十代藩主の斉興が握っていた。

京都で斉彬の訃報を聞いた西郷は直ちに殉死を決意するが、家定の継嗣問題で一橋派に与した京都清水寺成就院住職の月照の説得により思い止まった。

(8) 西郷二度の島流し

〔一回目の遠島〕

西郷に死を止まらせた月照であったが、「安政の大獄」で追われる身となり、西郷と共に薩摩に逃れるが、藩主が変わった薩摩藩では月照の保護を拒み日向国（宮崎県）送りを命じ、そこで誅殺するつもりであった。月照と西郷は鹿児島湾から日向に向かう途上、前途を悟り入水自殺を図った。同船していた護衛の武士たちが直ぐさま海に飛び込み二人を救い上げたが、月照は落命しており、西郷はやっと息を吹き返した

藩は、月照と西郷は死んだものとして扱い、急いで作った二人の墓を幕府の捕吏に見せたので納得して藩を離れた。

その後、幕府の目から西郷を隠すため安政5年12月、奄美大島に潜居させた。

藩主忠義の父久光は、文久元年（1861年）10月公武幹旋に乗り出す。京都で行動するに伝手がなく、大久保利道らの進言で西郷を島から召喚することにした。

久光に呼び出された西郷は、『藩主でない久光には、公武幹旋は無理だ』と発言したため、久光の不興を買う。それでも大久保利通らの説得で西郷は上洛を承諾し、久光から下関で待機する命を受けるが、下関で京都や大阪の逼迫した情勢を聞いた西郷は、無断で大阪へと出発してしまった。

〔二回目の遠島〕

西郷が待機命令に従わなかったことに久光は激怒し、西郷は再び遠島を命ぜられ、文久2年（1862年）6月「徳之島」に流され、更に「沖永良部島」へと遠のく。しかし、その後の薩摩藩の世評悪化（佐幕、攘夷の両派から非難）と人材不足から、再び大久保らの進言により西郷は島から1年半振りで帰還することになった。



大久保 利通

(9) 江戸無血開府



徳川 慶喜

第14代将軍徳川家茂は、慶応2年7月、21歳で大阪城で病死してしまった。その跡を第15代将軍として継承したのが最後の将軍となる徳川慶喜（1837～1913年、一橋慶喜）である。

この年12月25日には、第121代孝明天皇（1831～67年）が36歳で崩御（毒殺説あり）された。

将軍となった徳川慶喜は、慶応3年10月、周囲の勧めにより京都・二条城において大政奉還を表明し、その後大阪城に移ってしまう。12月に朝廷は王政復古を宣言した。

そして、慶応4年（1868年）正月、鳥羽伏見の戦いで幕府軍は新政府軍に敗れ、徳川慶喜は海路江戸に向かい、着くや江戸城を出て上野山寛永寺「大慈院」に籠って恭順の意を表すが、徳川の息の根

を止めねば治まらない新政府軍は、西郷隆盛を徳川征討軍参謀長として江戸に向かって進軍した。

これを迎える旧幕府側は、明治元年3月13日、勝海舟（1823～99年）が江戸・芝高輪の薩摩藩下屋敷において西郷と会談して、江戸総攻撃を止めさせたというのが歴史上の通説となっている。

しかし、徳川慶喜から徳川征討軍参謀長に恭順の意を伝えるため使者を命ぜられ、その4日前の3月9日に征討軍参謀長が陣を張る駿府（静岡）で西郷と会見し、慶喜の誠意を伝え江戸総攻撃を中止させる談判を行ったのは、幕臣の山岡鉄舟（1836～88年。一刀正伝無刀流の開祖で、通称は鉄太郎）である。

山岡は、街道くまなく配置されている征討軍の中を通行手形も持たず『朝敵徳川慶喜の家来、山岡鉄太郎まかり通る』と堂々と歩を進め、あつけにとられる征討軍の中を通過して進んだ。

談判に当たり、西郷が出した「五ヶ条」の条件のうち、徳川将軍の他家お預けを除く四つ（①城明け渡し ②城中の人数を全て移す ③兵器を渡す ④軍艦を渡す）を承諾し、江戸総攻撃の中止を約束させたのである。西郷隆盛5尺9寸（179

cm）29貫目（109kg）42歳、山岡鉄舟6尺2寸（188cm）28貫目（105kg）33歳、互いに威風堂堂とみえても、山岡にとっては命がけの会談だったのである。

40石の小身旗本から軍事総裁にまで上り詰めた海舟は、停戦協定は職務上当然の仕



山岡 鉄舟

事であったとしても、手柄を独り占めにする記述を新政府の賞勲局に書き出していたのが、誤解を招く原因である。



勝海舟



高橋泥舟

後の人たちは、山岡鉄舟、高橋泥舟（1835～1903年、鉄舟の義兄で槍の達人）、勝海舟を「幕末の三舟」と呼んだが、海舟は知略に優れ世渡りや政治性に勝っていたところは西郷や鉄舟に真似は出来ないが、西郷や鉄舟のような人間として透徹した高潔さと深みには比すことできないであろう。

西郷は鉄舟を評して、『生命も金も、名誉も要らぬ男は、始末に困る』と言ったという。鉄舟ばかりでなく西郷自

身も『生命も金も、名誉も要らぬ男』であったこと間違いない。

江戸の街がもし戦火で壊滅していたならば、江戸遷都はなかったであろう。西郷と会談するため決死の敵陣突破を果たした鉄舟の行動は、我が国歴史の将来を方向付けた偉業として称えられる。鉄舟は、父の勧めで13歳から禅を修業、45歳で大悟し、明治21年7月坐禅のまま大往生を遂ぐ。享年53歳。

(10) 西南戦争

西南戦争は、余りにも悲惨で語るに忍びない。西郷の純粹さは、国のため人のためなら身命を惜しまない覚悟ができていたからで、こんな西郷に戸惑いを覚え、あるいは抵抗を感じ、無き者にしようとした政府高官がいたことも確かである。下野（官職を辞して）して鹿児島に帰った西郷を抹殺しようとする魔の手が延びたことに、西郷から学ぶ若き志士たちの決起があった。心ならずも「西南戦争」の勃発となり、最後は、戦い窮り西郷の自決によって終わる。

後に唄われた民謡、「田原坂」歌詞の一部を記すので、西郷を偲ぶ縁（よすが）としていただきたい。

「雨は降る降る 陣場は濡れる 越すに越されぬ 田原坂」

「田原坂なら 昔が恋し 男同士の 夢の跡」

「春は桜よ 秋なら紅葉 夢も田原の 草枕」

「心濡らすな 虫の音時雨 此処は田原の 古戦場」

「右手（めて）に血刀 左手（ゆんで）に手綱 馬上豊かな 美少年」

「山に屍 川に血流る 肥薩の天地 秋淋し」

「草を褥に 夢やいずこ 明けのみ空に 日の御殿」

「泣いてくれるな 可愛（いとし）の駒よ 今宵忍ばば 恋でなし」

「どうせ死ぬなら 桜の下よ 死なば屍に 花は散る」

3 西郷の銅像

(1) 上野公園の銅像

東京都江東区の上野恩賜公園入口の階段を登ると、悠揚たる姿で犬を連れ散歩する西郷像がある。



西南戦争で敗れた西郷は、官位を褫奪（ちだつ）され、死後、賊軍の将として扱われたが、明治22年（1889年）2月11日、「大日本帝国憲法」発布に伴う大赦で赦され、正三位を追贈された。その後、恩賜金や全国有志の寄付によって、高村光雲（1852～1934年、高村光太郎の父）が像を担当し、傍らの犬（愛犬のツン）は後藤貞行（1850～1903年）によって完成し、西郷の死後21年を経た明治31年（1898年）12月18日に完成し除幕式が行われた。

西郷は大の写真嫌いだったため、1枚の写真も残されていない。冒頭の画像にしても聞き伝えと親族をモデルにして書かれたというから、想像の域を出ていない。この除幕式に招かれた西郷の妻・糸子は、『うちの人は、こげじゃなか』と言ったという。

この地に建った理由は、言うまでもなく徳川慶喜が恭順の意を表して籠った所であり、西郷が江戸城の無血開城から徳川家の後始末に至るまで一切を仕切ったからである。像の身長は370cm、胸囲：256.7cmと雄大な姿は、見る者をして維新改革に生死を懸けた心意気が伝わる。

因みに、皇居前広場の楠正成（1294～1336年。鎌倉末、室町初期の武将）銅像も高村で、馬も同じく貞行作である。二人は息の合ったコンビであった。



西郷糸子の写真

(2) 鹿児島市の銅像

貧しい下級武士の子として生まれた西郷は、名君島津斉彬の取立てと薫陶のよろしきを得て、倒幕そして明治維新という大事業へ向けて東奔西走した。中でも、江戸の無血開府をはじめ明治の新政府樹立に大きな功績があった。

この像が立つのは、新政府軍と西南戦争を戦い、武運つたなく自刃し西郷終焉の地となった鹿児島市城山で、現在は鹿児島市立美術館となったその前庭にある。

昭和3年（1928年）、薩摩藩出身で明治時代の日本海軍司令長官として日清戦争、日露戦争の勝利に大きく貢献した元帥・東郷平八郎（1848～1934年）の依頼により、鹿児島市出身の彫刻家安藤 照（1892～1945）によって制作された。

依頼を受けた安藤は、体格や外見をどう表現するか模索し、国内は勿論のこと欧州まで出向いて研究したというが、構想はできてもその後はモデル探しに苦労した。や

つとのこと出会ったのは山形県人であった。

軍服の像は、明治6年(1873年)に習志野で行われた大演習に陸軍大将として参加したときの姿をイメージしたもので、依頼を受けてから9年後の昭和12年(1937年)にようやく完成し、5月23日に設置された。この時既に、依頼者の東郷は没していた。

台石を含む高さは約8m、この像を見た西郷を知る人たちは『西郷どんとそっくりだ』と異口同音に発したという。

西郷像のモデルその人は、依頼から7年を経過した昭和10年(1935年)、安藤のアトリエに胸像の製作依頼に訪れた人がいて、その付添いで同行した山形県議会議員(東村山郡選挙区)の石澤宏太郎(1890~1958年)である。石澤を一目見た安藤は、『西郷像のモデルを探していたが、貴方ほど似ている人はいない。是非に・・・』と懇願された。石澤の身長は5尺8寸(185cm)と西郷とあまり変わりはないが、体重は90kgと109kgと違うため、晒布など巻いて西郷の軍服を身にまとったようだ。

日本彫刻界の重鎮であった安藤は、残念ながら昭和20年5月、太平洋戦争最中に東京空襲の犠牲者となってこの世を去る。

東京都渋谷駅前に昭和9年(1934年)に建てられた初代の「忠犬ハチ公」像も、安藤の製作であった。現在の二代目ハチ公像は、照の長男・士の作品で、大戦終戦後の昭和23年(1948年)に建てられた。

以下に、このモデルに関する2010年10月28日付「山形新聞」の記事を転載するので参照されたい。

また、インターネットから「西郷隆盛 本当の顔」を検索すると、石澤宏太郎の血を引き仙台市に住む孫の方の動画がある。風貌も驚くほど西郷をイメージさせるので、是非ご一覧いただきたい。



中山と鹿児島不思議な縁

西郷隆盛像制作の秘話

鹿児島県鹿児島市城山町にある西郷隆盛像。この像のモデルとなったのは、当町川端地区出身の元県議会議員である故石澤宏太郎氏（昭和33年に69歳で逝去。故石澤資弘元収入役の父）であることをご存知でしょうか。この銅像制作の秘話を紹介します。

モデル探しに6年

※写真は、いずれも、石澤宏太郎氏の孫で仙台市在住の石澤徳幸さんに提供していただきました。



隆盛の軍服を着てポーズをとる石澤宏太郎氏



鹿児島市城山町にある西郷隆盛像

制作の話が持ち上がったのは、昭和2年のこと。先に建立されていた獵犬を連れた東京上野の西郷隆盛像は、除幕式の際、隆盛の夫人の糸子さんが、「主人はこんな人ではなかった」と叫んだと伝えられており、鹿児島島の像は、「ぜひとも似ているものを」との声が上がりました。しかし、西郷隆盛は大の写真嫌いだっただけで、写真が1枚も残っていませんでした。制作の依頼を受けた鹿児島市の彫刻家安藤照氏は、隆盛の逸話や遺品を集めたり、似ていると言われる人物を研究するなど、イメージ作りに奔走。隆盛の孫である西郷隆治さんらをモデルに試行錯誤を繰り返したとも伝えられています。身長180センチの隆盛

に比べ、隆治さんは小柄だったため、思い通りのイメージを作ることができず、苦労したようです。

石澤氏と安藤氏が出会ったのは、モデル探し始めてから6年余りが経過した昭和10年のことでした。安藤氏に亡くなった一人娘の胸像の制作を依頼した伯父とともに、東京の安藤氏のアトリエを訪ねた際、「あなたほど西郷に似ている人はいない」と、モデルになることを懇願されたといいます。石澤氏は、身長178センチ、体重90キログラム、当時の男性としては隆盛にも負けない大柄な体型。遺族にも会い、そっくりだとお墨付きを得ました。

銅像制作の逸話

石澤氏は、何度か安藤氏のアトリエに通うこととなりました。服装は、隆盛が陸軍大將のときに実際に着用した軍服で、安藤氏のリクエストに応じて、いろんなポーズをとったといいます。

大柄な石澤氏でしたが、隆盛の軍服はやや緩く、胸や腹に綿を入れ、サライシを巻いたとのことで、隆盛の体の大きさがうかがい知れます。数年の間、イメージ作りに苦労し、制作に踏み切れずにいた安藤氏も、石澤氏との出会いによって勢いづき、翌年、ようやく西郷隆盛像が完成しました。

秘話の公開

モデルが石澤氏であることが明るみになったのは、昭和25年のこと。山形新聞の記者が、別の件で石澤氏のもとへ取材に訪れた際、石澤氏自らが、モデルが自分であることを公開しました。

石澤氏は、制作者の安藤氏に、自身がモデルであることを他言しないよう口止めされ、制作中の写真のネガも焼却されてしまいました。しかし、のちに、石澤氏は、「知っているのは私だけになり、時代も変わったのだから」と、秘話を披露したのです。

今は、軍服姿の写真11枚と前後左右から撮られた上半身写真4枚の計15枚の写真が、石澤氏の孫の文朗さん宅に残されています。文朗さんをはじめ、親族の方々は、モデルになったときの話をよく聞かされていたそうです。

また、余談ではありますが、隆盛の弟従道は、明治15年10月5日に行われた山形県長崎学校（現町立長崎小学校）の開業式に、新政府からの来賓として出席しています。

鹿児島と中山の不思議な縁を感じずにはいられません。

※参考資料

- ・西郷銅像の真実（監修石澤徳幸）
- ・平成20年12月30日南日本新聞

3 敬天愛人に学ぶ

(1) 天地人の理道に和す

平成24年7月のワンポイントレッスンは、私の師である和道流空手道創始者の大塚博紀（1892～198年）の道歌[その4]であった。

今回のテーマは「天を敬い、人を愛す」であるが、この言葉の初出と1、の出典のところで述べたように、清朝第4代皇帝の康熙帝が扁額を書いてキリスト教会に与えとことに始まるが、キリスト教の教理よりも中国の哲理に頻出する「天地人」の考えが根底となっている。

その中で、私は古代中国には次の思想があったとして、[葉適（1150～1213年、南宋永嘉学派）の「葉適思想淺説」]から、次のように天地人の言葉（現代文）引用した。

聖人は、天を敬して責めず、天を畏れて求めず。天自づから天道あり、人自づから人道あり」なので、天地は結合された一つの世界を意味する。天地の間にある形あるものは一つとして同じものではなく、それぞれに理（ことわり）がある。そして、人は人間世界に共通する仁義礼智信という理があつて、この理と近似する概念に道がある。「理」に対して「道」はより含みの多い概念で、それは天地や人や万物に則して存在する基本的な原則であるとともに道理だからである。

それに、次のようにコメントを加えた。

この天地人は、「天は絶対的な力を持つ正義の父として、地は私たちを包み込む母の存在として、人は道理にしたがい繁栄を築くもの」と解釈できないだろうか。

だから、『天の道に背かず、地の理に逆らわず、人の道に悖らず、天地人の理道に和する』（大塚博紀著、「空手道」10頁）は、全能の天の意思に反せず、万人の目から見て恥とならない徳を積み、環境や社会の摂理に反しない倫理観を日常とし、尊厳を守り世界平和に貢献すること、としなければならない。

(2) 天を敬うとは

天を敬うとは、修業を道とする者にとって、道は自然の理から離れず、それに適っていなければならない。この行いが天地人理合の根源であるため、地と人を支配する最高の存在が天である。西郷が志を立てて以来、変わらず持ち続けた中に、既に「敬天愛人」は育まれていたといえる。

キリスト教なら、『天にましますわれらの神よ』（主の祈り、マタイ伝6章9-13他）の天なら「我らの主」であり「父」なので、信仰する人の心に宿る神で対象となる存在がある。

これに対し東洋の天は、対象となる明確な存在はないが、天は上方から万人を見下ろし、一人一人を見抜いている「真理の眼」であったかもしれない。

キリスト教思想家の内村鑑三（1861～1930年）が英文で書いた著書「代表的日本人」（訳者・鈴木範久）の「西郷隆盛」（新日本の創設者）の22頁で、西郷を次のように評している。

『わが主人公（西郷のこと）は、日夜、好んで山中を歩んでいたとき、輝く天から声が直接くだることがあったのではないのでしょうか。静寂な杉林のなかで「静かなる

細い声」が、自国と世界のために豊かな結果をもたらす使命を帯びて西郷を地上に遣わされたことを、しきりと囁くことがあったのであります。そのような「天」の声の訪れがなかったなら、どうして西郷の文章や会話のなかで、あれほど「天」のことが語られたのでしょうか。』と。そして、『天はあらゆる人を同一に愛する。ゆえに我々も自分を愛するように人を愛さなければならない（我を愛する心をもって、人を愛すべし）』と。

西郷自身が育んだ人間性は、天を敬い、己を尽くし、人を咎めず、我が誠の足らざるを思い、慈愛をもって他者に接することであった。

このことと、西郷の情のもろさとは関係するのだろうか。

(3) 西郷の敬天愛人

西郷がこの言葉を揮毫するようになるのは、明治7年以降と前に書いた。西郷の生涯は残り4年である。しかも、この言葉を揮毫する前から西郷の人生観は、全てこの「天を敬い、人を愛す」に貫かれていたことも事実である。

例えば、次の特徴的な性格と事象からも推察できる。

ア 日常における欲望がなく、日々の生活ができれば満足していた。

イ 身なりの気遣いや、見栄を張ることがなく、財産にしても無関心であった。西郷が詠んだ次の漢詩（現代語訳）からも理解できよう。『我が家の法、人知るや否や。児孫のために、美田を買わず』

ウ どんな人に対しても、平穏な生活をかき乱すことをしなかった。豪放ながら繊細な情緒の持ち主といえる。

エ 人を怒らなかつた。例えしくじっても、咎めない心の広さをもって接したため、その人はかえって深く反省するのが常であった。

オ 天はあらゆる人を平等に愛するとの考えから、差別の心を持たなかつた。

カ 心が清く志が高ければ、天はその人に真心がありと見てくれると考え、策動や根回しなど裏工作をしなかつた。

キ 人間の成功は、まず己に克つにあると考えた。我が身を愛する（自己愛）のは欲が生じ、慎みが失せ、楽なことを望むからしくじりの元と考えていた。

ク 国家のためなら、常に命を投げ出す覚悟ができていた。

ケ 命も名誉も、金も地位も要らないという人こそ最も扱いにくい人間である。だから、こんな人こそ人生の困難を共にでき、国家のために本当の働きができると考えた。山岡鉄舟が徳川慶喜の使者として、命懸けで静岡まで尋ねてきた時、鉄舟を評して述べた言葉も同様である。

コ 意見は述べるが、人と議論することをしなかつた。

サ 人情にもろく、誠ある人間には命を捨てることも厭わなかつた。例えば、月照に同情して入水した事件など。

シ 正義を歩み、正義のためなら国家と共に倒れる精神がなければ、外国と満足できる交際は期待できない。外国の強大さを恐れ和平を乞いその意に従うならば、外国の侮辱を招く（植民地化）と考えた。

ス 淋しがりやの一面があった。昼夜となく飼い犬と山野巡りを好んだ。物言わぬ犬と淋しさを分かち合い、何を語り掛けたのだろうか。

おわりに

「情けは人のためならず」という諺もあるが、西郷の情け深さと、自己犠牲を厭わない生き方は、どこで身に着いたのだろうか。

人には稟性という生まれ持っているベースがあって、そこから月日を重ねて導かれた性格とか気質が生まれる。また、訓練や学習によって変性され、性根となって発現される。

西郷生涯の行動を導いた思想と信念は、父の吉兵衛、福昌寺住職の無参和尚、最初の上役で郡奉行の迫田太次右衛門、島津藩第11代藩主の島津斉彬、ここでは触れなかったが水戸藩士で水戸学の藤田東湖（1806～55年、安政大地震で死去）など、優れた人たちとの出会いと感化が相まって、50年の人生が構築されたものとする。

二度目の島流しとなった沖永良部島から呼び戻される時、迎えに来た人々に国の将来構想を砂浜に棒をもって図示説明する姿を見て、彼らは『西郷は神だ』と驚愕している。

西郷の性格から、権力の座に着き名も金も備わり、文明開化（西洋かぶれか？）一辺倒となってしまった嘗ての盟友たち、その隔たりは、如何ともし難い障碍となっていったのも仕方のない現象だったかもしれない。

時を隔てた今、大久保利通や木戸孝允の名と業績を知らない人でも、西郷の人柄を慕い学ぼうとする人が何と多いことか。

先月までの上杉鷹山に続き、今回は鷹山と同様に大好きな西郷隆盛を書けたのを幸いとする。

（おわり）

本稿の作成に当たり次を参考資料とし、又は一部を引用している。

- 1 代表的日本人（著者・内村鑑三、訳者・鈴木範久。岩波文庫）
- 2 文化論之概略（著者・福沢諭吉。岩波文庫）
- 3 西郷南州遺訓（山田濟齋編。岩波文庫）
- 4 西郷隆盛（著者・池波正太郎。角川文庫）
- 5 山岡鉄舟（著者・大森曹玄。春秋社）